論　文

現代英語における助動詞 will と shall の意味的拡張について：*Mother Goose in Prose* における実例研究

中澤　紀子（大東文化大学文学部）

On the Semantic Extension of *Will* and *Shall*: A Case Study of Modals in *Mother Goose in Prose*

Noriko NAKAZAWA

0. はじめに

本稿の目的は、大きく分けて二つある。ひとつは、中澤（2017）で目標とした研究の一部を成すものである。すなわち、英語の助動詞（auxiliary verb）の中で、「話法の助動詞あるいは法助動詞（modal auxiliary）」と呼ばれるものを対象にして、各々、その多岐にわたる意味・機能について、中心的意味・イメージを捉え、そこから意味の拡張モデルに基づいて多種多様な意味グループが派生的に出てくるというふうに見ていく。そうすることで、それぞれの法助動詞の多岐にわたる意味・機能をグループ化し、中心的意味とそこからいろいろな方向に拡張していった意味グループ全体を、有機的に結びついた集合体と見る。それによって、それぞれの助動詞の本質を明らかにし、なぜ、一見ばらばらに見える多くの意味・機能を持つのかという疑問に対して、共時的観点から、統一的説明を与えることをめざすものである。中澤（2017）では、助動詞 should を扱ったが、本稿では助動詞 will と shall を中心に分析を進める。

本稿のもう一つの目的は、上記の目的で扱う助動詞 will と shall を実際の文学作品 *Mother Goose in Prose* の中の一つの短い物語 'Sing a Song o' Sixpence' における実際の使用に照らして、その意味・用法を検証することである。

1. 法助動詞（modal auxiliary）の持つ２種類の意味・機能と本論の展開

中澤（2017）では、それぞれの法助動詞は、特に典型的な can, may, must を中心として、それぞ

れが持つ複数の意味・機能を 2 種類に分けて考えることがあり、ひとつは、主語に関して、能力・許可・義務などを表現する場合、もうひとつは、話者の立場から可能性・推測・必然性などを述べる場合であると述べた。前者の意味・機能は、‘root（基本の）[1]’ と呼ばれ、典型例として、can は「～できる」という能力、may は「～してもよい」という許可、must は「～しなければならない」という義務を表わすとされている。後者の意味・機能は、‘epistemic（認識様態の）[2]’ と呼ばれ、典型例として、can は主に否定形の cannot で「～のはずがない」、may は「～かもしれない」、must は「～にちがいない」という蓋然性の判断を示すとされている。

本稿で扱う助動詞 will と shall について、ここでは暫定的に ‘root（基本の）’ の意味・機能としては、「意志（volition）」、‘epistemic（認識様態の）’ の意味・機能としては、「予測（prediction）」があるとしておく。ただし、以下では、どちらが、root で、どちらが epistemic かという区別はせずに、will と shall は、現代英語という共時的観点からすると、それぞれ中心的な意味（core meaning）として 2 種類の意味・機能を持ち、そこから多種多様な意味が派生していると考えることにする。

以下、第 2 節では、will と shall の多岐にわたる意味・用法を概観し、共時的に見ると、それらは、中心的な意味（core meaning）から、その意味の一部を共有して意味的拡張が起こり、大きな意味グループを形成しているという仮説をたてる。

第 3 節では、第 2 節で立てた仮説に従って、will と shall の意味の拡張をまとめて示す。

第 4 節では、*Mother Goose in Prose* の中の一つの短い物語 ‘Sing a Song o’ Sixpence’ における助動詞 will と shall の実際の使用例を分析して、第 3 節でまとめた意味の拡張のどの部分にあたるかを検証し、またさらに、will と shall がどのように使い分けられているかを説明することをめざす。

2. 助動詞 will と shall の中心的意味と意味の拡張

助動詞 will と shall は、典型的な法助動詞 can, may, must ほどは、‘root（基本の）’ と ‘epistemic（認識様態の）’ の 2 種類の意味・機能について議論されず、その一部は、法助動詞として扱われないことも多い。その結果、「単純未来」と「意志未来」というふうに単純化されて扱われたり、それに合わないものは「特殊用法」として扱われたりする傾向がある。また、一方では、助動詞 should の場合のように、多種多様な意味・用法をグループ化して羅列的に表示することも行われてきた。

本稿では、生成文法や認知文法（cognitive grammar）などの理論的枠組みで複数の学者・研究者たちによって個別に提案されてきたプロトタイプ（prototype）理論、中核（core）から周辺（periphery）へと放射状に意味の拡張や構文の拡張が起こるモデル[3]などを参考にして、助動詞 should の場合と同様に、助動詞 will と shall に関して、中心的な意味から、意味の一部を共有しながら意味の拡張によって、複数の意味グループがいろいろな方向に放射状に広がる意味拡張モデルを提案する。

従って、助動詞 will と shall の持つ多種多様な意味・用法を、歴史的考察はひとまず保留して、

共時的な視点に立って、中心的な意味から意味的拡張を伴って多くの派生的意味が生ずる大きな意味の集合体と考えることにする。

2.1. 助動詞 will の中心的意味（core meaning）

will の中心的意味・イメージは、2 種類あり、ひとつは、「主語によって表わされる人が、これから何かをやろうとすること」【主語の意志（volition）】、もうひとつは、「主語ではなく話者がこれからの事を予測すること」【話者の予測（prediction）】であると考えられる。

will の意味の中心（core）に近いと思われる用法のひとつには、次のようなものがある。

（1） a．If you **will** do so, I'll be obliged to you.
もしあなたがそうしてくださるなら、ありがたいのですが。　安井（1996）p.171
b．"You still haven't told me anything." "I **will**."
「君はまだ何も話してくれていないね。」「お話しします。」　*ibid.*

（1a, b）の例は、安井（1996）でも意志・願望を表わす場合の例として挙げているように、まさに上で簡単に説明した【主語の意志（volition）】の意味・機能を持つものと考えられる。

will の意味の中心（core）に近いと思われる用法のもう一方は、次のようなものである。

（2）a．You **will** be sorry for it later.
いまに後悔するよ。　安井（1996）p.171
b．According to the weather report, it **will** be cloudy tomorrow.　Azar（2009）p.63
c．John **will** go to Washington tomorrow.[4]
（＝*I predict* that John goes to Washington tomorrow.）　荒木・小野・中野（1977）p.358

（2a）の例は、安井（1996）では単純な未来を表わす場合の例として挙げてあるが、（2b）の例は、Azar（2009）では will が prediction を表わすと説明されている。また、（2c）でも will の意味は、パラフレーズの斜体字部分 *I predict* に相当し、（パラフレーズの that 節に相当する）命題内容を話者が予測していることになる。従って（2a, b, c）の will の意味・機能は、【話者の予測（prediction）】であると想定する。

2.2. 助動詞 shall の中心的意味（core meaning）

一方、shall の中心的意味・イメージは、「主語によって表わされる人が、（周囲の状況によって必然的に）これから何かをやることになると話者が客観的に判断している」【必然】であると考えられる。

shall の意味の中心（core）に近いと思われる用法のひとつには、次のようなものがある。

（3） a． I **shall** have more time next week.

来週になるともう少し時間があるのですが。　安井（1996）p.175

b． We **shall** set out at two o'clock.

私たちは 2 時に出発します。　*ibid.*

c． I **shall** arrive at nine.

（“**will**” =more common）　Azar（2009）p.205

（3a, b）の例は、安井（1996）では shall が単純な未来を表わす場合の例として挙げてあり、主としてイギリス英語の用法であると付記してある。また、（3c）の例を、Azar（2009）では、「I か we を主語とする（一人称の主語の）場合に未来を表わす」と説明し、この意味用法の場合 will の方が普通よく使われると付記している。

しかし、（3a, b, c）の shall の意味・機能は、（2a, b, c）の will の意味・機能である【話者の予測（prediction）】と比べたとき、will の場合のような単なる話者の（時には主観的な）見通しや予測でなく、周囲の状況からそうならざるを得ない必然性が含まれていると考えられる。（ただし、そのニュアンスの差は顕著でないので、アメリカ英語では will が用いられるようになったのかもしれない。）

ここでは、（3a, b, c）のような shall の意味・機能を【必然性を含む話者の予測】【必然性を含む話者の客観的判断】としておく。いずれにしても共通点は、shall に含まれる【必然】すなわち「周囲の状況・事態によって必然的にそうなることになる」という意味要素である。これは、中澤（2017）で扱った should の中心的意味・イメージのひとつであり、shall から should に受け継がれたものと考えられる。

2.3. will の中心的意味【主語の意志】【話者の予測】を強調する方向への拡張

2.3.1. 【主語の意志】から【強固な意志】さらに【固執】への意味の拡張

人間を表わす主語の「意志」が意味を強調する方向に拡張されると「強固な意志」「固執」の意味になると考えられる。以下の例を見てみよう。

（4） a． Bob **will** have his will in everything.

ボッブはすべてのことに意地を通そうとする。　安井（1996）p.171

b． You **will** have your own way.

君はどこまでも意地を張る。　*ibid.*

2.3.2. 【主語の意志】から【習慣】【習性】さらに【傾向】への意味の拡張

人間を表わす主語の「意志」が継続し、定着すれば、その人の「習慣」や「特性」となり、（以下の（5a, b））また、動物が主語の場合は、その動物の「習性」を表わす意味になる（以下の（5c, d））

ことは自然である。さらに無生物の主語になれば、その無生物があたかも継続的な意志を持っているかのようなイメージから「一般的によくあること」「傾向」という意味が派生される（以下（5e, f）参照）のもごく自然な意味の拡張である。

（5）a．Jane **will** sit for hours without saying a word.
ジェインはよく一言もしゃべらないで何時間もすわっている。　安井（1996）p.171

b．Whenever he meets anyone, he **will** boast of his son.
彼は誰に合ってもきっと息子の自慢をする。　*ibid.*

c．A bear **will** not touch a dead body.
熊は死人の体にはふれないものである。　安井（1996）p.172

d．Unless driven by hunger, a lion **will** not attack man.
ライオンは飢えない限り人を襲わない。　*ibid.*

e．Accidents **will** happen when they are least expected.
事故は全然予想もしていないときに起こりがちなものだ。　*ibid.*

f．Errors **will** slip in.
誤りは紛れこむもの。　*ibid.*

2.3.3.【主語の意志】の否定から【拒絶】への意味の拡張

主語が人間の場合、その意志の否定形 will not = won't [5] は「拒絶」になる（以下の（6a）参照）ことは容易に想像できる。また、主語が無生物の場合は、上の（5e, f）で見たようにその無生物にあたかも意志があって、そのあとに示された動作を拒絶しているかのようなイメージになる（以下（6b）参照）と考えられる。

（6）a．She **won't** listen to me.
彼女は私の言うことを聞こうとしない。　安井（1996）p.172

b．This window **won't** open, however hard I try.
この窓は、どんなに一生懸命私がやっても、どうしても開かない。　*ibid.*

2.3.4.【話者の予測】から【話者の期待・要求】さらに【命令】への意味の拡張

will の持つもう一つの中心的意味・イメージは、【話者の予測（prediction）】であると仮定したが、そこからも意味の拡張による新たな意味の派生が見られる。

中心的（core の）意味・イメージでは、will は、話者が文の命題の表わす内容を単に予測する機能を持っていたが、文の主語が 2 人称の you である時、それは、聞き手に対する「期待」や「要求」（以下の（7a, b））に拡張しやすいと考えられる。さらに、話者が主語で表わされる人物に対して権威ある立場の場合は、それが、「軽い命令」（以下の（7c））や否定形の場合の「軽い禁止」（以

下の（7d, e））の意味にまで強まると考えられる。

（7） a． You **will** help me, I'm sure.

きっと助けてくださるでしょうね。　安井（1996）p.173

b． You **will** pack and leave this house.

荷物をまとめてこの家を出てもらいたい。　*ibid.*

c． You **will** do it at once.

君はすぐにそれをしたまえ。　*ibid.*

d． You **will not** disturb me while I am reading.

私が本を読んでいる間、じゃまをしてはいけない。　*ibid.*

e． You **will not** go out today; you **will** stay in and work.

今日は外出しないで、家にいて勉強しなさい。　*ibid.*

上記（7）に見られるような意味の拡張が「軽い命令」「軽い禁止」にとどまり、本格的な「命令」「禁止」にまで強まらないのは、どうしてだろうか。それは、元が「話者の予測・期待」であったことと、will のもう一つの中心的意味が「主語の意志」であることと関係していると思われる。つまり、「あなたがあなたの意志で～してくれることを、私（話者）は期待していますよ。」という内容を押し付けがましくした形と考えてもよいかもしれない。この考察については、あとで（2.4.2 節で）shall の場合と比較することにする。

2.4. shall の中心的意味【必然】を強調する方向への拡張

2.2 節で述べた shall の中心的意味・イメージは、「主語によって表わされる人が、（周囲の状況によって必然的に）これから何かをやることになると話者が客観的に判断している」というやや複雑なものであったが、これを表記の便宜上【必然】と呼ぶことにする。

2.4.1. 【必然】から【強い意志表明】や【宣言】【覚悟】への意味の拡張

shall の持つ【必然】の意味は、前半の「主語によって表わされる人が、（周囲の状況によって必然的に）これから何かをやることになる」という部分と、後半の「そのことを話者が客観的に判断している」という部分から成り立っている。前者の意味は、特に shall の意味・機能の根幹を成すもので、意味の拡張が起こっても保持されると考える。

後者の意味は、主語と話者が一致している場合、つまり、主語が一人称である場合は、「強い意志表明」や「宣言」「覚悟」へと意味の拡張が起こり得る。ただし、その場合でも、will の場合の「自らの意志・願望」というよりも「周囲の状況・事態によって必然的にそうせざるを得ない」という場合の「強い意志表明」や「覚悟」であると考えられる。

2.4.2. 【必然】から【強制力】への意味の拡張

一方、主語と話者が一致していない場合、つまり、主語が一人称以外である場合は、特に、話者が聞き手に対して権威ある立場の場合は、周囲の状況による必然性が高まり、結果的に、「単なる客観的な判断」からある種の「強制力」に発展すると考えられる。

具体的には、次の（8a, b）に見られるように、文の主語が 2 人称の you である時には、聞き手である you に対して、周囲からそうせざるを得ない圧力がかかり、その実現に向けて強制力が働くと考える。また（8c）に見られるように、文の主語が 3 人称であるときには、聞き手を介してそうせざるを得ない圧力がかかり、その実現に向けて強制力が働くと考える。

（8）a．You **shall** have it back tomorrow.
明日はそれを返してあげますよ。　安井（1996）p.175

b．You **shan't**（ = **shall not**）leave till you promise to come again.
もどってくると約束するまで、出かけてはいけません。　*ibid.*

c．He **shall** stay in bed.
彼は寝かせたままにしておきましょう。　*ibid.*

ここで、上の 2.3.4 節の（7）の後で触れた will の意味の「軽い命令」「軽い禁止」への拡張が、「あなたがあなたの意志で～してくれることを、私（話者）は期待していますよ。」という意味から、その強制力が強まったものであるのに対して、（8）の shall の意味の「強制力」への拡張は、「周囲の状況による必然性が高まり、それが強制力として働く」という意味で、同じ「強制力」といっても質の違うものであることを強調しておきたい。

3. 助動詞 will と shall の意味の拡張のまとめ

ここで、第 2 節で詳しく見てきた will と shall の意味拡張の様子を、中心からいろいろな方向に放射状に延びるモデルをイメージしてまとめておきたいと思う。

まず、助動詞 will の中心的意味（core meaning）は、ひとつが「主語によって表わされる人が、これから何かをやろうとすること」【主語の意志（volition)】、もうひとつが「主語ではなく話者がこれからの事を予測すること」【話者の予測（prediction)】である。

3.1. 助動詞 will の意味の拡張のまとめ

A.【主語の意志】を強調する方向への拡張には、次のような意味の拡張がある。

1.【主語の意志】→【強固な意志】→【固執】
2.【主語の意志】→【習慣】【習性】→【傾向】
3.【主語の意志】の否定形 →【拒絶】

B.【話者の予測】からの意味の拡張には、次のようなものがある。

1.【話者の予測】→【話者の期待・要求】→【命令】

（ただし、主語の意志が関係する軽い命令）

一方、助動詞 shall の中心的意味（core meaning）は、「主語によって表わされる人が、（周囲の状況によって必然的に）これから何かをやることになると話者が客観的に判断している」ことであり、これを便宜的に【必然】と呼ぶことにした。

3.2. 助動詞 shall の意味の拡張のまとめ

C.【必然】を強調する方向への拡張は、次のような意味の拡張である。

1.〈主語が 1 人称の場合〉

【必然】→【強い意志表明】【宣言】【覚悟】

2.（主語が 2 人称・3 人称の場合）

【必然】→【強制力】

（ただし、周囲の状況による必然性が高まり、それが強制力として働くもの）

4. *Mother Goose in Prose* における助動詞 will と shall の実際の使用例分析

助動詞 will と shall について、それぞれの中心的な意味（core meaning）と意味の拡張によってどのように多様な意味が派生しているかを 2 節で詳しく考察し、3 節でまとめて図式化した。

本節では、L. Frank Baum によって書かれた短編物語集である *Mother Goose in Prose* から ‘Sing a Song o’ Sixpence’ という物語を選んで、その全文における助動詞 will と shall の生起を調べ、助動詞 will と shall の多種多様な意味のうち意味的拡張のどの段階のものが使われているか、また、will と shall の使い分けがどうなっているかを考察する。

Mother Goose in Prose（1901）は、*The Wonderful Wizard of Oz*（『オズの魔法使い』1900）の作者として知られている L. Frank Baum（1856–1919）が、古くから伝承されている比較的短い詩であるマザーグースのうた[6] から、よく知られた詩 22 篇を選び、それを基にそれぞれを短い物語に仕立て上げたものである。すなわち、伝承されている詩を基にして、新たに散文（prose）の物語を創作したわけである。

この物語集の中から ‘Sing a Song o’ Sixpence’ という物語を選んだのは、著者はアメリカ人であるが、この物語は英国に古くから伝わる伝説であるという設定になっているため、敢えてイギリス英語を使い、意味が解らなくならない程度に敢えて古い形の語を使うという工夫がなされているため、本稿の研究対象の助動詞 will と shall、特に shall が出てきやすいためである。

分析に使用したテキストは、下記のオリジナル本の複写版である。

Mother Goose in Prose by L. Frank Baum illustrated by Maxfield Parrish

1901 by Geo M Hill Company, Bounty Books, New York
（L. Frank Baum による Introduction の日付は、Chicago, Illinois, July, 1899.）

4.1. 現在の時点で語られている冒頭部分

＜ギリグレンと王様のパイの伝説をお話ししましょう[7]＞

まず、'Sing a Song o' Sixpence' と呼ばれるよく知られたマザーグースのうたを示した 4 行の詩のあと、物語に先立って、作者が「もしあなたが、ギリグレンと王様のパイの伝説を聞いたことがなければ、上の 4 行の詩は何を言っているのかさっぱりわからないでしょうね。そこで、これからその伝説の物語の一部始終をお話ししましょう。そうすれば上の 4 行の詩が何を言っているのかよくわかるようになるでしょう。[7]」と、あたかもこの物語が古くからの伝説であるかのように装って読者の興味を引きつけようとする部分。

(9) If you have never heard the legend of Gilligren and the King's pie you <u>will</u> scarcely understand the above verse; so I <u>will</u> tell you the whole story, and then you <u>will</u> be able to better appreciate the rhyme.

Mother Goose in Prose（1901）
（以下、MGP と略す）p.19

(9) のひとつめの you <u>will</u> ... の will と 3 つめの you <u>will</u> be able to ... の will は、3.1 節でまとめた図式の B. の中心的意味（core meaning）の【話者の予測】、一方、2 つめの I <u>will</u> tell you... の will は、A. の中心的意味の【主語の意志】であると考えられる。

4.2. 過去の伝説として語られている部分

この部分は、作者が物語の冒頭で設定しているように、古くから語り継がれた伝説の形を取り、その舞台となっているのは英国の古い時代である。従って、台詞以外は過去形で語られ、台詞はその時点を現在として書かれている。

4.2.1.「もし、6 ペンスもらえたら[7]」

ここでは、物語の台詞の部分だけを取り出して、誰の台詞かを示しながら会話の流れの中で will と shall の意味を分析することにする。次節以降も同様。

(10) Gilligren（以下、G と略す）：If I had six pence I could make my fortune.
Uncle（以下、U と略す）：Pooh! nonsense! a sixpence is a small thing. How then could you make a fortune from it?
G：That I cannot tell you, but if you <u>will</u> give me the sixpence I <u>will</u> go to London, and not

return until I am a rich man.

U：The boy is a fool!

Aunt（以下、Aと略す）：Give him the money and let him go, and then we shall be well rid of him and no longer be obliged to feed and clothe him at our expense.

MGP p.20

主人公の少年 Gilligren がおじ（Uncle）に向かって言う台詞の if you will give me the sixpence I will go to London, … の中に現われている will は、どちらも A. の中心的意味の【主語の意志】であると考えられる。

また、おば（Aunt）の台詞中の shall は、「(6 ペンスくらいだったら）お金をあの子にやって（ロンドンでもなんでも）行かせちゃいなさいよ。そうすれば、あたしたちには、いい厄介払いになるし、あたしたちのお金であの子の衣食を養う義務もなくなるんだから。」という文脈で用いられていることから、3.2 節の C. の shall の中心的意味（core meaning）である【必然】であると考えられる。すなわち、「主語によって表わされる人（ここでは Aunt）が、周囲の状況（Gilligren に 6 ペンスやって家から出してしまうこと）によって**必然的に**これからどうなる（いい厄介払いになり、自分たちのお金で Gilligren の衣食を養う義務もなくなる）と話者（Aunt 自身）が客観的に判断している」ということになる。

4.2.2. 「もう二度と迷惑はかけません」

（11）U：Well, here is the money; but remember, this is all I shall ever give you, and when it is gone you must not come to me for more.

G：Never fear, I shall not trouble you again.

おじ（Uncle）が Gilligren にお金をやって家から出してしまうことを決め、6 ペンスを渡す場面で、おじは、「でもよく覚えておけよ、わしがお前にやるのはこれっきりだぞ。このお金が無くなっても、もっとお金をくれなんて、わしの所へ来ちゃならん。」という意味のことを言っている。ここで使われている shall は 3.2 節の C. の 1 の【強い意志表明】【宣言】であると考えられる。

また、そのおじの言葉に対する Gilligren の返答の「そんなことは絶対にない。もう二度と迷惑はかけません。」という文脈で使われている shall も、C. の 1 の【強い意志表明】【宣言】【覚悟】であると考えられる。

4.2.3. 「あれっぽっちのお金じゃ二日と持たないだろう」

（12）U：The money will not last him two days, and when it is gone he will starve to death.

A：Or he may fall in with people who will treat him worse than we did, and then he'll wish

he had never left us.

(12) は、おじからもらった 6 ペンスを持ってロンドンへと旅立つ Gilligren を見送るおじ (Uncle) とおば（Aunt）の台詞である。ここに現われている will は 4 つとも、3.1 節の B. の中心的意味の【話者の予測】であると考えられる。

4.2.4.「俺にその 6 ペンスをくれるなら...」

Gilligren がロンドンへの旅の途中で悪い Farmer（実は詐欺師）と出会った場面。

（13）Farmer（以下、F と略す）：If you <u>will</u> give me the sixpence, I <u>will</u> give you a sack of rye for it.

MGP p.21

ここで用いられている will は、どちらも A. の中心的意味の【主語の意志】であると考えられる。

次の（14）は、6 ペンスと引き換えにもらったライ麦の袋がほとんど空っぽだったことに抗議した Gilligren に対して、悪い Farmer が詐欺の手口を披露する場面。

（14）F：It is a sack of rye, nevertheless, and I did not say how much rye there <u>would</u> be in the sack I <u>would</u> give you.

MGP p.22

悪い Farmer は、6 ペンスと一袋のライ麦との交換が終わった時点で「そうは言っても（「ライ麦一袋って言ったのに、袋の中にはほんの一握りのライ麦しか入っていない」という抗議に対して）（取引の時に）俺は、お前にやる袋の中にどのくらいの量のライ麦が入っているかなんてひと言も言ってないぜ。」と堂々と詐欺の手口を披露している。文中の would は 2 つとも、取引の時点での will が、取引が終わった時点では過去になっているための時制の一致によるものである。従ってこの would も will の実例の 1 つとして扱うと、その意味は、I did not say how much rye there <u>would</u> be ... の方は B. の中心的意味である【話者の予測】、また、... the sack I <u>would</u> give you. の方は、A. の中心的意味である【主語の意志】を表わしていることがわかる。

4.2.5.「一握りのライ麦なんて僕には何の価値もない」

（15）G: Why <u>should</u> I keep a handful of rye? It <u>will</u> be of no value to me at all.

MGP p.23

これは、悪い Farmer に騙されてなけなしの 6 ペンスを失った末に、それと引き換えにもらった

一握りのライ麦を手にしてGilligrenが呟いた台詞である。後半のIt will be of no value to me at all. の中に現われる will は、「それ（一握りのライ麦）は僕にとって何の価値も持たないだろう。」という文脈で出てくるので、B. の中心的意味の【話者の予測】であると考えられる。

なお、（15）の前半に出てくる should については、単に shalll の時制の一致によるものではないので、ここでの考察からは省くことにする。

4.2.6.「衛兵を呼んでお前を捕まえてもらわなければならなくなるぞ」

Gilligren がロンドンに到着して、王様の宮殿の裏側に廻って王宮の台所を眺めていると、それに気づいた宮殿の召使い（Servant）が、Gilligren を不審者と見なして尋問する場面。

（16）Servant（以下、 S と略す）：What are you doing here?
G：I am waiting to see the King.
S：The King! The King never comes here, and neither do we allow idlers about the royal kitchen. So depart at once, or I shall be forced to call a guard to arrest you.

MGP p.24

（16）では、Servant が Gilligren に対して言う「即刻立ち去れ、さもないと衛兵を呼んでお前を捕まえてもらわなければならなくなるぞ。」という台詞の中に shall が出現する。この shall は、C. の中心的意味である【必然】から C. の 1 の【強い意志表明】【宣言】に至る途中の意味拡張の段階にあると考えられる。すなわち、Servant は、自分の立場上（職務上）「お前がここから立ち去らなければ、（主語の）自分は、衛兵を呼んでお前（不審者）を捕まえてもらわなければならなくなる」という必然的な状況に立って、これから起こることを話者として客観的に判断しているわけである。

4.2.7. 「あなたに黒ツグミを渡すわけにはいかない」

Gilligren が、「一握りのライ麦なんて持っていてもしょうがない」と思って地面に撒き散らしたことで、たまたま捕まえた 24 羽の黒ツグミを、宮殿の台所で働く料理人の Mr. Baker が王様から注文された黒ツグミのパイを作るために是が非でもほしいと言っているという状況の中で、Gilligren が発した台詞。ここでは、文脈がよくわかるように、台詞だけでなく、物語の地の文も一緒に示すことにする。

（17）“But it would be cruel to put the beautiful birds in a pie,” remonstrated Gilligren, “and I shall not give them to you for such a purpose.”

MGP p.25

（17）の ... and I shall not give them to you for such a purpose. という文の中に現われる shall

は、C. の中心的意味である【必然】から意味の拡張により C. の 1 の【強い意志表明】【宣言】に至ったものと考えられる。ここで Gilligren は、「こんなきれいな鳥（黒ツグミ）をパイの中に焼きこむなんで残酷だ」とこの台詞の前半で言っていることから、そんな状況では必然的に「黒ツグミをあなたに渡すことはできない」と「強い意志表明」を行なっているわけである。

なお、(17) の前半に出てくる would については、単に will の時制の一致によるものではないので、ここでの考察からは省くことにする。

4.2.8. 「黒ツグミが殺されるのはいやだ」

Mr. Baker が「黒ツグミのパイを作ることは、王様の直々の御注文だし、王様はことのほか黒ツグミのパイがお好きなのだ。」と事情を打ち明けて懇願するのに対して、Gilligren が発した台詞。ここでも、文脈がよくわかるように、台詞だけでなく、物語の地の文も一緒に示すことにする。

(18) “Still, you cannot have them,” declared the boy stoutly, “the birds are mine, and I <u>will</u> not have them killed.”

MGP pp.25-26

(18) の台詞の中で Gilligren は、「それでも（そういう事情があるとは言っても）あなたに黒ツグミを渡すことはできません。」とそれまでの自分の考えを曲げずに断言し、その理由として後半で「この黒ツグミは僕のものだから、この黒ツグミが殺されるのはいやなんだ（僕はどうしてもこの黒ツグミを殺させたくないんだ）」と言っているわけである。

従って、ここに現われている will は、A. の 1 の【主語の意志】から意味的に強調する方向に拡張された【強固な意志】を表わしている。また、ここでは否定形で使われていることから、A. の 3 の【拒絶】と考えてもよいと思われる。

4.2.9. 「条件のひとつはあなたが黒ツグミを殺さないこと」

王様から注文されたパイを作るためにどうしても黒ツグミがほしい Mr. Baker と黒ツグミを絶対に殺させたくない Gilligren との葛藤の中、Gilligren は名案を思いつき、2 つの条件付きで黒ツグミを Mr. Baker に渡すことを提案する。

(19) G：You can have the blackbirds on two conditions.
Mr. Baker（以下、B と略す）：what are they?
G：One is that you <u>will</u> not kill the birds. The other condition is that you secure me a position in the King's household.
B：How can I put the live birds in a pie?
G：Very easily, if you make the pie big enough to hold them. You can serve the pie after

the King has satisfied his hunger with other dishes, and it will amuse the company to find live birds in the pie when they expected cooked ones.

B：It is a risky experiment, for I don't know the new King's temper. But the idea may please His Majesty, and since you will not allow me to kill the birds, it is the best thing I can do. As for your other condition, you seem to be a very bright boy, and so I will have the butler take you as his page, and you shall stand back of the King's chair and keep the flies away while he eats.

MGP pp.26-27

（19）の 3 行目の Gilligren の台詞 One is that you will not kill the birds. の中に現われる will は、自分の出す条件の中で相手（You）のこれからの行動を要求しているわけなので、B. の 1 に示したように【話者の予測】から意味の強調の方向に拡張が起こり、【話者の要求】の意味で使われていると考えられる。

また、7 行目の Gilligren の台詞 …, and it will amuse the company to find live birds in the pie when they expected cooked ones. に現われる will は、to find live birds in the pie when they expected cooked ones を表わす形式主語の it を主語としていることからも容易に判断できるように、B. の中心的意味の【話者の予測】であると考えられる。

次に、（19）の最後の Mr. Baker の長い台詞の中に現われる will と shall を検討してみよう。パイの中に生きたままの黒ツグミを入れておいて、王様の食事コースの最後に出して王様を含めて一緒に食事をしている人々を驚かせ、楽しませようという Gilligren の斬新なアイデアに対して、懸念を持ちながらも賛成せざるを得ない Mr. Baker の台詞である。

下から 4 行目の …, and since you will not allow me to kill the birds, it is the best thing I can do. の中の will は、「君が私にどうしても黒ツグミを殺すことを許さない以上、それ（上に示した Gilligren の斬新なアイデア）が私にできる最善の方策だ。」という文脈に現われているので、A. の 1 の【主語の意志】から意味を強調する方向への拡張が起こり、【強固な意志】または【固執】の意味になったと思われる。

下から 3 行目と 2 行目の …, and so I will have the butler take you as his page, and you shall stand back of the King's chair and keep the flies away while he eats. の中に現われる will と shall は、「君のもう一つの条件については、君はとても頭のよい子のようだから、執事に頼んで、君を執事の小姓として雇うように取りはからおう。そうすると、君は王様の椅子の後ろに立って、王様のお食事の間、蠅を追い払う役目をすることになろう。」という文脈の中で用いられている。従って、will は、A. の中心的意味である【主語の意志】を表わす。

一方 shall が現れる環境は、「Mr. Baker が執事にこれから頼んで、その結果、Gilligren が執事の小姓として雇われるという状況が実現したら、必然的に王様の椅子の後ろに立って、王様のお食事の間、蠅を追い払う役目をすることになる。」ということだから、この shall は、C. の中心的意味で

ある【必然】の意味を表わす。つまり、詳述すると、「主語によって表わされる人（ここでは Gilligren）が、（周囲の状況によって必然的に）これから何かをやることになる（ここでは、王様の椅子の後ろに立って、王様のお食事の間、蠅を追い払う役目をすること）と話者（ここでは Mr. Baker）が客観的に判断している」と考えられる。

4.2.10. 「これより、そなたを私の（直属の）小姓として召し抱える」

伝説の物語の最終部分で、Gilligren は、王様に認められ、王様の直属の小姓のひとりとして召し抱えられることになる。その時の王様のお言葉が次の台詞である。

（20）King: You are a clever youth, and deserve a better position than that of a butler's lad. Hereafter you <u>shall</u> be one of my own pages, and if you serve me faithfully I <u>will</u> advance your fortunes with your deserts.

MGP p.28

ここに現われる shall は、王様という権威のある人物が発した言葉であることから、C. の 2 に示すように【必然】から【強制力】に意味が強まっていると思われる。ただし、C. の 2 のただし書きに示したように、それは、話者の王様が強制したというより、王様のお言葉により周囲の状況による必然性が高まり、それが結果として強制力として働くという意味である。

また、この台詞の後半に現われる will は、「君が私に忠実に仕えてくれるなら、君の功績に応じてどんどん取り立ててやろう（昇進させてやろう）。」という文脈の中で、A. の中心的な意味である【主語の意志】を表わしている。ただし、王様という最高権力を持つ人物の言葉であるので、単に【主語の意志】といってもかなりの重みを持つものである。

4.3. will と shall の実際の使用例分析のまとめ

4.2 節で詳しく分析した will と shall の実例の意味の分布をまとめてみると次のようになる。

will の出現は、時制の一致のために would に変わった例を含めて 20 例認められる。そのうち、will の中心的意味（core meaning）のひとつである 3.1 節の意味基準の A.【主語の意志】を表わすものは 8 例あった。さらに意味的拡張の結果 A. の 1 の【主語の意志】から【強固な意志】または【固執】に発展したものは、2 例あった。

また、もうひとつの will の中心的意味（core meaning）である 3.1 節の意味基準の B.【話者の予測】を表わすものは 9 例あった。さらに意味的拡張の結果 B. の 1 の【話者の予測】から【話者の要求】または【命令】に発展したものは、1 例であった。

一方、shall の出現は、全部で 7 例認められる。そのうち、shall の中心的意味（core meaning）である 3.2 節の意味基準の C.【必然】を表わすものは 2 例であった。さらに意味的拡張の結果 C. の 1 の【必然】から【強い意志表明】【宣言】に至る中間段階まで発展したものが 1 例、C. の 1 の【必

然】から【強い意志表明】【宣言】【覚悟】に発展したものは、3 例であった。他方、C. の 2 に示すように【必然】から【強制力】へと意味の発展があったのは 1 例であった。

以上の実例分析の結果、この作品においては、will は、中心的意味（core meaning）の【主語の意志】や【話者の予測】を表わすような出現が多く、意味的拡張がある場合は、ひとつには、【主語の意志】から【強固な意志】または【固執】へ、また、もうひとつは、【話者の予測】から【話者の要求】へと発展した例が見られた。

一方、shall は、中心的意味（core meaning）の【必然】を表わすものは、will の中心的意味の出現頻度に比べて比較的少なく、反対に意味的拡張によって【必然】から【強い意志表明】【宣言】【覚悟】などに発展したものは、中間段階のものも含めて、will の場合の意味的拡張よりも頻度が多かった。このことは、中心的意味（core meaning）の【必然】を表わす shall は、主にアメリカ英語では will に取って代わられる傾向と関係があるのかもしれない。[8]

5. will と shall の使い分け

第 4 節の実例研究の目的は、ひとつには、4.3 節でまとめたような、物語の全文における助動詞 will と shall の生起を調べ、その多種多様な意味のうち意味的拡張のどの段階のものが使われているかを調べることであったが、もうひとつは、will と shall の使い分けがどうなっているかを検討することであった。

以下で、第 2 節の理論編と照らし合わせながら、*Mother Goose in Prose* の物語の中での will と shall の意味・機能の面からの使い分けについてまとめてみよう。

第 2 節で、will の中心的な意味（core meaning）は、「主語によって表わされる人が、これから何かをやろうとすること」すなわち【主語の意志（volition)】と「主語ではなく話者がこれからの事を予測すること」すなわち【話者の予測（prediction)】であると仮定した。第 4 節ではその意味・機能に合致する実例が多く認められた。

一方、shall の中心的な意味（core meaning）は、「主語によって表わされる人が、（周囲の状況によって必然的に）これから何かをやることになると話者が客観的に判断している」というやや複雑なものであり、便宜上それを【必然】と呼ぶことにした。第 2 節の例文では、【必然性を含む話者の予測】【必然性を含む話者の客観的判断】の意味・機能が見られ、いずれにしても共通点は、shall に含まれる【必然】すなわち「周囲の状況・事態によって必然的にそうなることになる」という意味要素であった。この要素は、第 4 節の実例においても、すべての shall の出現に見られた。

なお、註の 8 でも触れたように、will の中心的意味の 1 つの【話者の予測】と shall の中心的意味の【必然】に関しては、法助動詞ではなく「単純未来」の意味・機能だとする考え方もある。しかし、第 2 節の（2）と（3）で比較したように、shall の意味・機能は、will の意味・機能である【話者の予測（prediction)】と比べたとき、will の場合のような単なる話者の（時には主観的な）見通しや予測でなく、周囲の状況からそうならざるを得ない必然性が含まれていると考えられる。第 4

節の実例においても（10）と（19）の shall にそのような中心的意味としての【必然】の意味があることが確認された。

次に、意味的拡張が起こった場合の will と shall の違いについてまとめておこう。第 2 節では、それぞれいろいろな方向への意味の拡張があることを想定したが、注意すべきは、次の 2 つの一見似ているが基本的に違う点である。

第 1 点は、will の中心的意味のひとつである【主語の意志】は、主語が一人称の時に「強固な意志」「固執」へと意味の拡張が起こり得る。また、shall の持つ【必然】の意味は、主語と話者が一致している場合、つまり、主語が一人称である場合、「強い意志表明」や「宣言」「覚悟」へと意味の拡張が起こり得る。ただし、その場合でも、shall の「強い意志表明」の意味・機能は、will の場合の「自らの意志・願望」から来る「強固な意志」ではなく、「周囲の状況・事態によって必然的にそうせざるを得ない」という場合の「強い意志表明」や「覚悟」であると考えられる。この違いは、第 4 節の実例では、一方で（18）と（19）の 3 つめの will の例、他方で、（11）の 2 つの shall,（17）の shall の例との間に顕著に観察される。

第 2 点は、第 2 節の（7）と（8）の例の will と shall の違いである。（7）の will には、文の主語が 2 人称の you である時【話者の予測】→【話者の期待・要求】→【命令】という方向の意味の拡張が起こり、（8）の shall には、文の主語が 2 人称・3 人称の場合【必然】→【強制力】という方向の意味の拡張が起こりやすい。両者は「要求」「命令」「強制力」という一見類似の意味になるようだが、will の場合の「要求」「命令」は、「あなたがあなたの意志で～してくれることを、私（話者）は期待していますよ。」という意味の強制力が強まったものであって、「命令」とは言っても相手の意志が関わっている。それに対して、shall の意味の「強制力」への拡張は、「周囲の状況による必然性が高まり、それが強制力として働く」という意味で、同じ「強制力」といっても質の違うものである。第 4 節の実例では、（19）の 1 つめの will と（20）の shall の間にその違いがみられる。

註

1　‘root（基本の）’と呼ばれる意味機能は、荒木・小野・中野（1977）pp.344-345 では、（根源的）という訳語が与えられ、「文の主語が持つ（あるいは主語に与えられる）意志、特性、能力、許可、義務などの意を表わす」とされている。また、修飾という観点からは、「根源的法助動詞（root modal）は、動詞句を修飾する」とされている。

2　‘epistemic（認識様態の）’と呼ばれる意味機能は、荒木・小野・中野（1977）pp.344-345 では、（陳述緩和的） という訳語が与えられ、「文が表わす陳述（statement）、 すなわち命題（proposition）についての話者の知識や判断を表わす意味内容を持つ」とされている。また、修飾という観点からは、「陳述緩和的法助動詞（epistemic modal）は、陳述（命題）全体を修飾し（そして文の断定的な力を緩和する）」とされている。

なお、中野（1993）によると、epistemic という用語は ‘knowledge’ を意味するギリシャ語

epistēmē に由来し、epistemic modality（認識的法性）とは、本来「知識」に関する論理を扱う認識論理学（epistemic logic）で用いられる用語である。認識論理学における認識的法性とは知識に基づく可能性・必然性をいうが、英語のような自然言語を扱う言語学においては、話者の自らの知識に基づく判断という概念を広く捉えるのが一般的であるので、可能性（possibility）と必然性（necessity）だけでなく、蓋然性（probability）や確実性（certainty）といった概念も認識的法性の中に含められる。

[3] Kajita（1977）（1997）他で提案されている動的文法理論、Lakoff（1987）で展開されているプロトタイプ（prototype）理論、認知モデル理論の中の放射状カテゴリー（radial category）などを参照。

[4] 以下、例文中の太字や下線は、元の文献での表示法によらず、本稿内で表示を統一するため、筆者がつけたものである。

[5] won't は will not の縮約形であるが、-o- のつづり字が入っているのは、中期英語（ME）の wol not に由来するためである。Cf. 安井（1996）p.172

[6] 「マザー・グース（Mother Goose）のうた」とは、英国をはじめとする英語圏で主に口承によって伝承されてきた伝統的な詩や童謡のことを指し、ナーサリー・ライム（nursery rhymes）と呼ばれることも多い。

[7] 4.1 節の冒頭の、物語の内容の一部を表わすタイトルと内容の和訳、4.2 節以降の台詞の内容の和訳、4.2.1 以降の節のタイトルの和訳は、すべて筆者の試訳である。

[8] 2.1 節の例文（2）と 2.2 節の例文（3）のところでも触れたように、will の中心的意味の 1 つの【話者の予測】と shall の中心的意味の【必然】に関しては、法助動詞ではなく「単純未来」の意味・機能だとする考え方もある。

参考文献

Azar, Betty S.（& Stacy A Hagen）（2009）*Understanding and Using English Grammar*, 4th edition, Pearson/Longman.

Kajita, Masaru（1977）"Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, 44–76.

Kajita, Masaru（1997）"Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," *Studies in English Linguistics,* ed. by Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shuji Chiba, 378–393, Taishukan, Tokyo.

Lakoff, George（1987）*Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind,* The University of Chicago Press, Chicago and London.

Leech, Geoffrey N.（1971）*Meaning and the English Verb,* Longman, London.

Murphy, Raymond（2012）*English Grammar in Use,* 4th edition, Cambridge University Press,

Cambridge.
Oxford English Dictionary (*OED* 2009), Oxford University Press.

荒木一雄、小野経男、中野弘三（1977）『助動詞』現代の英文法　第 9 巻　研究社
荒木一雄（1997）『新英文法用例辞典』荒木一雄編　研究社
江川泰一郎（1991）『英文法解説』改訂三版　金子書房
中澤紀子（2017）「助動詞 should の意味の統合的説明に向けて：中心的意味からの拡張」『大東文化大学紀要』第 55 号　pp.31-44.
中野弘三（1993）『英語法助動詞の意味論』英潮社
寺澤芳雄（1997）『英語語源辞典』編集主幹　寺澤芳雄　研究社
安井 稔（1996）『英文法総覧』改訂版　開拓社

（2018 年 9 月 27 日受理）